

介護老人保健施設における入居中高齢者の 退居後の生活の場を選択する家族の認識

Family Perceptions of Resident Elders in Long-Term
Care Health Facilities Choosing Where to Live After Leaving the Facility.

○岸沖美織 藤原尚子

MIORI KISHIOKI, NAKO HUJIWARA

四天王寺大学 看護学部, 大阪青山大学 看護学部

Faculty of Nursing, Shitennoji University. Osaka Aoyama University, Faculty of Nursing

Key words : 高齢者, 生活の場, 家族の認識

【目的】介護老人保健施設（以下；老健）は、高齢者の在宅復帰および在宅療養支援の重要な拠点となっている。しかし、老健からの在宅復帰先は自宅に限らず多岐にわたり、生活の基盤を自宅以外に変更せざるを得ない高齢者とその家族が、生活の場を選択する必要に迫られている状況がある。高齢者とその家族にとって、尊厳ある生活を選択するためには、互いの意向や希望を尊重することが重要である。そこで本研究は、介護老人保健施設に入居している高齢者の退居後の生活の場を選択する際の家族の認識を明らかにする。

【研究方法】老健退居後の生活の場として、自宅や他施設を希望している高齢者の家族7名にインタビューを行い、半構造化面接法を用いてデータを収集、分析にはSCAT(Steps for Coding and Theorization)を使用。

【結果】自宅を選択した家族は、老健入居に至るまで高齢者の介護を行いながら一緒に生活することを当然としていた。命の危機的な状況から、高齢者が自宅で生活するために必要な身体機能の低下や、介護が困難になる自宅環境、自身の体調や介護の困難さ等を認識していたが、老健入居時には自宅復帰する方向、もしくは入居後早い段階で自宅復帰の選択をしていた。家族は、高齢者の意向を直接的に確認したり思いの推察をし、高齢者と築いてきた歴史による絆と自身の信念を振り返り、自宅復帰に向けた行動を起こしていた。自宅以外を選択した家族は、老健入居に至るまでの生活は、自分たちなりの自律した生活の維持への努力があった。高齢者は命の危機的な状況などで入院し、自宅復帰が困難な身体機能の低下で介護が必要な状態となったため、生活が困難な家屋環境や、母と夫の介護負担、介護者となる家族自身の身体的制約、家族の事情などさまざまな状況を認知し老健入居に至った。家族は高齢者の自宅復帰が難しい状況に苦悩や葛藤を感じながらも、面会時の高齢者の様子やスタッフ

の情報から、現在の生活に適応できているのか不自由な思いをしていないかなど思いの推察を行い、自分にできる介護の役割を果たしていた。また信頼できる介護と対応によって高齢者が安寧な生活が送れており、安心して預けられると感じていた。

【考察】本研究では、自宅を選択した家族は、家族の歴史や絆、高齢者の意向を尊重しながら、積極的に自宅復帰を支援する姿勢を見せていた。一方、自宅以外を選択した家族は、介護環境の限界や自身の生活状況により自宅介護を断念し、高齢者の生活の安定を願いながらも施設での生活を支える選択をしていた。いずれの家族も高齢者の尊厳を守りつつ、自身の生活も大切にしようとする姿勢を示しており、高齢者への思いを持ちながら、可能な範囲で介護役割を果たしていることが確認された。支援者は、家族が高齢者の生活環境を選択する過程を理解し、単にその瞬間の選択結果を評価するのではなく、これまでの生活の経過や意思決定に至るまでの背景、家族が抱えてきた価値観や信念を深く尊重することが重要である。家族や高齢者が心身ともに充実した生活を送れるよう、支援者が各家庭の状況に応じた柔軟なサポートを行うことが求められる。今後の課題として、より多様な家族構成や背景を含めた調査を通じて、高齢者と家族の双方が自分らしい生活を送り、尊厳を持って暮らせる支援方策の確立が必要であることが示唆された。

【引用文献】

加藤由香里 (2021). 患者と家族の思いに沿った退院支援 その2 -先駆的に退院支援を実践している退院調整看護師及び地域資源担当者の退院支援における関わりから-. 岐阜県立看護大学紀要, 21 (1), 151-163
山角敬子, 生野繁子 (2021). 家族介護者支援において看護職と支援相談員が大切だと感じていること KJ 法による特性の対比. 日本看護福祉学会誌, 27 (1), 41-52